元気に出会う！

今月のKey Word

古楽器

時を越えて 心に響く音

ロバの音楽座　松本雅隆さん

毎日の生活を楽しく、豊かなものにしてくれる音楽。
一口に音楽といっても、好みのジャンルも違えば、
心地いいと感じるリズム、音色、メロディ、シンフォニーは
人それぞれに違い、しかも気分で変わるもの。
そして、心地いいと感じる理由はうまく説明できない。
音楽とは何か？　音とは何か？　という根源的な問いを
投げかけながら音楽活動を続けている「ロバの音楽座」。
忘れられつつある世界の古楽器を使い、
子供たちを対象にした個性的なステージで、
素朴でぬくもりあふれる音楽を奏でている。

それぞれ担当楽器を1つ持ってもらった「ロバの音楽座」の皆さん。右／大宮まふみさん。楽器は「曲がった笛」を意味するクルムホルン。リードの付いた笛だ。中央／松本雅隆さん。楽器はハーディ・ガーディ。右手でハンドルを回しながら、左手で鍵盤を押さえる弦楽器。左前／冨田りぐまさん。楽器はポルタティーフ・オルガン。教会にあるパイプオルガンを小さくしたようなオルガンだ。左上／上野哲生さん。楽器はギターの先祖にあたるリュート。日本の琵琶とは親戚のような存在。

azbil 2011-10（azbil グループ PR 誌）の掲載記事より

素朴でぬくもりに満ちた音を古楽器の中に見つけた

珍しい古楽器や民族楽器がそろう建物

東京都立川市、清澄な水が流れる玉川上水は市民の憩いの場。せせらぎに沿ってのびる緑豊かな遊歩道を散歩していると、まるでおとぎの国から抜け出してきたような家に出くわす。ここは「ロバハウス」と呼ばれる、地元ではちょっと知られた建物。「ロバの音楽座」の稽古場であり、ライブホールとなる活動の拠点だ。ロバの音楽座とは、リーダーの松本雅隆さんをはじめとする5人が中心となって活動する合奏団のことだ。

キノコのような形がかわいらしい「ロバハウス」。

ロバハウスの中には、無垢板の床と珪藻土の壁によるナチュラルな空間が広がっている。そして驚くのが、所狭しと飾られている楽器の数々。見慣れない古楽器や民族楽器ばかりが並んでいるため、まるで博物館のような雰囲気だ。中には一体どうやって演奏するのか、見当もつかないようなものもある。

「実際に音を聴くと、見た目で想像していた音と違うことが多いですよ」と、松本さんは楽器を次々と演奏してくれる。牛の角に穴を開けただけの笛が、繊細な高音を響かせる。大きな袋から2本の長い棒が突き出た楽器は、大音量の音が鳴り響き、これがあのバグパイプかと気付く。鳴り続ける持続音とメロディを同時に奏でることができるバグパイプは、その場を一気に荘厳な雰囲気に変えた。箱型の琴を爪弾いていた上野哲生さんは、バグパイプの音色に合わせて即興演奏を始めた。二人のセッションにしばし耳を傾ける。

「ロバの音楽座」「カテリーナ古楽合奏団」を主宰する松本雅隆さん。1952年、福岡県北九州市生まれ。国立音楽大学で音楽教育を専攻後、教師を経て、上記の楽団を率いるミュージシャンに。
ロバハウスのホームページ = http://www.roba-house.com/

方向性に悩んだ末に理想の音を見つけた

ロバの音楽座の結成は1982年。その母体となったのは、松本さんが1973年に結成した、中世・ルネサンス時代の古楽器を演奏する「カテリーナ古楽合奏団」だ。松本さんは古楽器に興味を持ち始めた経緯を振り返る。

70年代の初め、国立音楽大学の学生だった松本さんは、自分の進むべき音楽の方向性が定まらずに悩んでいた。

「当時はデジタルの人工的な音が出始めた時期で、世の中に音があふれてきたように感じていました。また、音楽教育はヨーロッパのクラシック音楽を中心に行われるわけですが、テクニックを重視するあまり、人間の心を置き去りにしているような印象を受けていました。そんな状況の中で、果たして私が求めている音楽とは何なのかとずいぶん悩みました。答えが見つからず、音楽の道を諦めようかと一時は考えたほどです」と松本さんは話す。そもそも音楽であること以前に、心地よい音は何だろうと、自分の音を探し続けた。

「幼いころ、山で遊んだときに耳にしていた鳥の声やセミの声、風の音など、森の香りがするような素朴な音にリラックスできると思い当たりました。ですが、その音を音楽として表現する方法が見つからないのです」

毎年夏に森の中で4日間合宿する「ロバの学校」では、歌や楽器演奏、楽器作りなどのワークショップが開催される。上：最終の夜はグループごとに小作品を発表する「ガランピー祭」で締めくくる。左：「絵のような楽器」製作の様子。

❶スコットランドの伝統音楽でもおなじみのバグパイプ。❷「蛇のように曲がりくねった」という意味のセルパン。リコーダーのように穴を押さえるが、曲がっているため右手と左手が逆になる、難易度の高い楽器。❸水牛の角を使った笛、ゲムスホルン。オカリナのような牧歌的で柔らかい音が特徴。❹様々な弦楽器。指ではじいたり、棒でたたいたりする撥弦（はつげん）・打弦（だげん）系と弓などで擦る擦弦（さつげん）系に大きく分けられる。❺舞台でも使用する空想楽器の数々。段ボールや麻ヒモなど身近にある材料ばかりで作ったものだが、しっかりとした音が出て、メンバーが演奏すると思わず聴き入ってしまう。❻イランの撥弦・打弦系楽器、サントゥール。細長いスティックでたたくとキラキラと透明感のある、中東をイメージさせる音が響く。

授業に身が入らなかったが、大学の楽器展示室には毎日のように通った。見たことのない古楽器がどんな音を奏でるのか興味があったからだ。松本さんがあまりに熱心に訪れるので、ある日、顔見知りになっていた係員が古楽器を特別に触らせてくれた。

「音を出した瞬間、ああこれだ、と宝を探し当てたように思いました。現代の楽器に比べたら、音は緩いというか、どこか間抜け。でも、ぬくもりがあって森の香りが感じられる音なのです。それからすぐに仲間を集めて手軽なリコーダーを使って合奏を始めました。入れ込んでしまって、気付いたら1年も学校に行っていませんでした」と松本さんは笑う。

素朴で音を自由に奏でる古楽器ならではの世界

松本さんが熱中したのはバロック以前の中世・ルネサンス時代の古楽器だ。16世紀末から17世紀初頭にかけてイタリアで誕生し、ヨーロッパに広く浸透した文化様式であるバロックでは、音楽理論が緻密に追求され、楽器も高度な機械に変貌を遂げた。

「バロック音楽は文献も豊富ですし、楽器自体も当時のものがたくさん残っています。音楽が庶民のものから上流階級のものとして発展したことが大きな要因だと思います。洗練された音色が重視されるように、音の素朴さは失われていったのです」

古楽器は衰退したので、演奏方法を知る人もいなければ、資料も非常に乏しい。当然、古楽器の演奏を習得するのには大変な苦労が伴う。しかし、松本さんと仲間たちは、むしろその状況を楽しんだ。

「正解を誰も知らないということは、間違っていてもいいということですよね。あ、これはしめたぞ。自由だ！と思いましたね（笑）。資料としては、絵画が役に立ちます。例えば、16世紀のフランドル（現代のベルギー）で活躍していた画家・ブリューゲルは牧歌的な農村の風景をモチーフにし、群衆の中に楽器を持った人をたびたび描いているのですが、それを見て、この楽器は腰のあたりに抱えるのかとか、まねしてみるわけです。それから絵を参考に楽器を作ってみるようにもなりました。現代の楽器を作るのはとても無理ですが、単純な古楽器なら可能なんです。そんなところも古楽器の魅力ですね」

azbil 2011-10（azbil グループ PR 誌）の掲載記事より

今年8月に青山円形劇場で上演されたロバの音楽座「らくがきブビビのコンサート」の模様。説明的な言葉は一切使わず、古楽器を中心とした音楽、身体の様々な部位や日用品を利用して繰り出す音、ジェスチャーによって、1つの話のように進行していく不思議なコンサートだ。子供たちはコミカルなシーンで大いに笑い、心和む音色に聴き入っていた。同演目は今年度の児童福祉文化賞推薦作品に選ばれた。

子供の想像力を刺激する初めての「音と遊びの世界」

古楽器を独学で習得し その魅力を次世代へ

学校で習う芸術史を見直してみると、目に見える美術が紀元前から細かく歴史をたどっているのに対し、音楽はバロックになってようやく記述が始まることも多い。資料もない中で、中世・ルネサンス時代の音楽をどのように演奏しているのだろう。

「40年くらい前からバロック以前の音楽を再現するという風潮が盛んになりました。しかし、当時は研究者が演奏する例が多く、学術的ではあるのですが、何かつまらないんです(笑)。絵では農民たちはもっと生き生きと音楽を楽しんでいるように思えるし、教会ではもっと荘厳な曲が流れていたように思います。私たちは、わずかに残っている当時の楽譜からイメージをふくらませて、独自の音楽を作っています。合奏しながら即興的に作ることが多いので、ジャズの方法論に近いかもしれません」

ロバの音楽座は、古楽器が持っている可能性を生かして子供たちに音楽の素晴らしさを伝えるために生まれた。

「カテリーナ古楽合奏団の活動の傍ら、私は高校や専門学校で教師をしていました。音楽を教える立場で、音楽はもっと楽しく、自由であるべきだと思っていましたし、自分が古楽器を通じて体感している音を子供たちと共有したいと強く思うようになりました。利益や効率が優先され、自然環境や人間性が軽んじられるような風潮に反発する気持ちも強かった。古楽器のような原始的で素朴なものが、いずれ最先端になる日が来るという確信もありました」

音楽の原点を感じさせる 古くて新しい音の数々

ロバの音楽座では古楽器や世界の民族楽器、そして空想楽器を駆使して〝音と遊びの世界〟を繰り広げる。子供たちは、現代生活の中で耳にする機会の少ない音を聴き、音楽の原点を感じる。また、身近な素材を使った様々な音に刺激されて、限りない想像力をふくらませる。

「子供たちの反応はとても直感的で奥深いものがあります。例えば『誕生から別れ、循環』を音楽で表現した作品があります。説明を極力そぎ落とした抽象的な舞台にもかかわらず、次第に私たちの意図を理解し感じて入り込んでいく様子をよく目撃します。赤ちゃんもよく聴いてくれます。素朴な音がそれぞれの原体験を呼び覚ますからでしょうか。公演後に3歳くらいの子が『懐かしい』と感想を言っていたのには驚きましたけど(笑)」

ロバの音楽座は毎月1回ロバハウスでライブを実施しているほか、全国で公演を行い、年間250公演もこなしている。また、親子で楽器を手作りするワークショップを開くなど、公演以外のイベントも積極的に実施中。夏に開催される、子供たちが大自然の中で音楽に触れながら合宿する「ロバの学校」も31回を迎えた。

身の回りの音に 耳を澄ますことが大切

「日ごろから身の回りの音に耳を澄ますことが大切だと思います。今の子供たちにはもっと自然に触れさせて、自然の音をもっと聴かせてあげたいですね。でも、実は街なかにも心地いい音はいっぱいある。子供たちは宝探しが大人よりもずっと得意ですから」

音が本来持っている魅力を味わうためには、西洋的な進化を遂げた音だけを音楽とする常識を捨てなければならない。そしてその常識は大人が与えている場合が多いと松本さん。絶対音感を身に付けた人の中には、古楽器のような周波数の曖昧な音を不快なノイズとしてしか捉えられなくなるケースもあるようだ。

「音楽に絶対はないのです。もし絶対音感を教育するなら、聴く音によって音感を使いわけられるようにケアしないといけません。いろんな音があり、音楽を奏でるいろんな個性、いろんな聴き手がいるから、世の中の音はすてきに響くのだと思います」

松本さんは、毎年2回、古楽器や民族楽器を求めて世界を巡っている。現地の人と会うとき、そこに楽器があれば、言葉はいらないという。音という共通言語を胸に、音探しの旅はこれからも続く。

azbil 2011-10（azbil グループ PR 誌）の掲載記事より